七〇年代少女文化と性教育―〈愛〉の表現の諸相―

尾関未紗

はじめに

七〇年代少女マンガの流れの中で注目すべき点として、少年愛マンガの出現が挙げられる。中でも、竹宮惠子『風と木の詩』（「週刊少女コミック」、「プチフラワー」小学館、一九七六年―一九八四年）は大胆なベッドシーンを描き、注目された。

先行研究では、竹宮らが少女マンガに性愛を取り入れる前に、ジュニア小説において既に性愛表現は登場していた点は指摘されている。ジュニア小説の性愛表現の根底には純潔教育という問題があったが、それが少女マンガにもどのように影響しているかについての詳細な考察は少ない。

本稿では、性愛表現が少年愛マンガで発展した要因を、七〇年代少女文化における性愛表現、七〇年代の性教育とそれを巡るメディア展開から探り、そこから見えてくる少女マンガの性愛描写の黎明期への道筋を考察する。

一、『風と木の詩』に描かれた性愛

少女に向けた性の解放が、教育現場やジュニア小説の中でもたついている中、その動きは文学以外のメディアで発展する。

『風と木の詩』は少女マンガにおいて大胆にベッドシーンを取り入れ、少年同士の性愛を描いた作品である。

作品中での性愛描写は、自らコントロールすることさえも困難な衝動として描かれており、それは「感情の前に脈打つ体」、「触れてさえいないのに沸き起こる衝動」という形で現れて来る。「人間に性の欲望があるってことを…知らなかったわけじゃない だけど…こんなに自分を制御できないものだなんて！」（竹宮恵子『風と木の詩　白泉社文庫　第一巻』白泉社、一九九五年）と、少年たちはその衝動との向き合い方に苦悩する。また、ジルベールは不特定多数の人と交わるが、気高く誇りを失わないキャラクターとして描かれている。

こうした性愛描写に、連載時数多くの読者の声が寄せられ、おたよりコーナーでは読者同士で議論が行われることもあった。例えば、「映画や小説などでしばしば描かれる少年同士の熱い友情（愛情）は、女のわたしから見ても、すばらしいと思うことがありましたが、美少年ジルベールのベッド・シーンには、生理的な嫌悪感が起こったのです。ジルベールの白くか細い裸身があまりに美しいので、よけいいやらしく感じてしまうのです。[1]」という意見に対して、次のような編集部のコメントが載せられている。「一五号の長野県T・Sさん。あなたは『風と木の詩』を読んで、いやらしく感じたらしいけど、わたしはそうは思いません。ほんとうに愛しあっているならば、男であろうと、女であろうと、かまわないと思うのです（略）　※同意見のお手紙が殺到しています。あなたは？（編集部コメント）[2]」

このように、おたより欄にて、読者同士でベッドシーンについて意見しあっている。「週刊少女コミック」の誌面で作られていった、自由に性愛表現について意見できる場、コミュニティは、雑誌「JUNE」を通して広がっていく。

二、少女に向けて性を描くということ

二―一、ジュニア小説

『風と木の詩』において「衝動としての性愛」や「純潔を失っても誇りをなくさないキャラクター」が描かれるまでの道筋を考察するために、まずはジュニア小説の状況を確認する。

少女マンガが性を取り扱うより少し前、もしくは同時期に少女に向けて性を描いていたものがジュニア小説である。ジュニア小説とは、少女小説にとって代わる形で出現した少女向け読み物で、十代の性や愛といった思春期の悩み、男女の恋愛物語が多い。一九五〇年代後半以降、雑誌「女学生の友」を中心に少女小説に代わる名称として現れ、一九六六年雑誌「小説ジュニア」創刊を契機にジャンルとして定着した。

しかし、一九六七年の段階では、ジュニア小説の読者は性愛描写を求めていなかった。「かくれたベストセラージュニア小説　学園舞台の純愛もの」（一九六七年八月二九日「朝日新聞」）によると、ジュニア小説に描かれているのは「きれいな恋」で、純愛小説が中心。「小説女学生コース」編集長・高木は「七割方の女の子は昔ながらの純情派です。そして健康的なものをもとめています。」と語っている。事実、ジュニア小説の愛情表現はキス、それも「きれいなキス」が限定で、それ以上が現れると読者から非難されたそうだ。

当時、中高生が性愛表現に触れることはどう捉えられていたのか。「十代に群がるＳＥＸ中高生雑誌にも進出」（一九六九年一月二六日『朝日新聞』）では、成人向け雑誌について、中学二年生のクラス男子四二人、女子四五人を対象にしたアンケートの結果が掲載されている。少数が「世の中のことを知る糸口をつかんだ」「人間のおそろしさを知った」「下劣な内容が多い」「変なことばかり覚える」と回答し、男子の七一％、女子の八五％が「毒にもクスリにもならなかった」と答えている。ここから、成人雑誌が「役に立つ」「興味がある」という考えは学内アンケートでは言えない状況であることが推測される。

この結果に対して、アンケート実施校の山口教諭は「不健全な性の知識が容しゃなく中学生に注入されている。（略）正しいことを受け付けなくなることがおそろしい」と述べている。父兄の立場は割れており「こどもたちがいろいろの本でおとな以上のことを知っている。性道徳として正しい純潔教育を早めに教え、雑誌などを批判する能力をつけてほしい」、という意見と、「性教育はねむった子を起すようなもの」だとする意見がある。ここに、純潔教育（性教育）をすべきという立場／純潔教育はするべきでないという立場の対立構造が見える。

中、高生向き月刊雑誌「女学生の友」の編集長・富田は「性をまじめにとりあげてみようと二月号でスウェーデンの性教育を紹介した。あわせてアンケートをしたが、「先生も親も教えてくれなかった正しい性知識をこの記事が教えてくれた」という反響が圧倒的であったと述べている。ここから、正しい性知識を知りたい、性教育を求める少年少女の声、学校でも家庭でも性教育がされてない現実が分かり、少女たちの状況と大人の思惑にギャップがあることが読み取れる。

二―二、性描写の出現とメディアのバッシング

その後ジュニア小説にも性愛の表現が登場する。一九六九年、富島健夫が『おさな妻』を「ジュニア文芸」に掲載し、一九七〇年には集英社から刊行された。高校生が人妻になる設定で初夜のシーンがあるものの、描写は控えめであった。しかし映画化・ドラマ化に伴い、ジュニア小説の性描写の過激化の先鋒としてバッシングされた。

ここで、問題となった『おさな妻』の性愛描写を一部抜粋する。

① 主人公玲子が強姦未遂に合う場面（富島健夫『行く山河』「ジュニア文芸」小学館、一九六九年八月号）

玲子は身をねじる。（略）けれども、和郎はひるまずに玲子の腿を撫でる手を上に進ませ、下着に触れてきた。

玲子は夢中で叫んだ。

「やめて。お願い。行って」

「しっ。静かに。何もしない。ちょっとだけ、ね、ね、」

その声もうす気味わるくいやらしかった。和郎の手は強引に玲子の下着をくぐろうとする。

（略）

「ね、わるいことはしない。ちょっと愛撫したいだけなんだ。何もしない」

「お願い、もうよして」

「何もしないといっているじゃないか。ね、誰にも秘密だよ、だれも知らない。ああ、ちょっとじっとしていて」

そのことばに、玲子はまどわされなかった。触れられるだけでも、ある純潔は失われるのだ。

②　誠実な男性と初夜を迎える場面（富島健夫『おさな妻』「ジュニア文芸」小学館、一九六九年一一月号）

玲子は吉川にしがみついていた。吉川によってひらかれようとする世界にはいるために失われていくものがある。そのたよりなさを、吉川にすがってじぶんをしっかりさせようとしているのかもしれなかった。甘美な感覚が玲子をひたしはじめた。ときどき、吉川の指の位置は変わった。あるときはするどい電流が、玲子のからだをつらぬき、玲子は身をよじって声を発しなければならなかった。

玲子はさまよいはじめた。

吉川の姿勢が変わった。そのからだの重みを、玲子は感じた。くちびるを合わせた瞬間、玲子の方から強く吸った。そのとき玲子は、もうあとに引き返すことは考えていなかった。吉川にみちびかれてさらに進むことを、玲子も望んでいた。

右記のような描写の出現がバッシングの対象となったのである。「少女小説　セックスがいっぱい」（一九七〇年一月二一日『朝日新聞』）では、「少女小説の世界がガラリ変った。おとなたちが叙情の世界とばかり思いこんでいるうちに、いつの間にかセックスがはんらんしている。（略）吉屋信子らが築きあげた「星よ、スミレよ」の世界は全く消滅した。」と、少女小説誌の変化について言及されている。その例として、「大学を受験する男子と女子高校二年生が（略）その夜は同じ宿で眠る。（「ジュニア文芸」小学館、一九七〇年二月号「あしたの雲」）」、「昨年は、

主人公の一七歳の少女が新婚旅行をする過程を克明に描写した作品が一四歳から一八歳の少女の間で、大反響を呼んだことがあった。」といったものがあげられている。さらに、一九四三年三月、「女学生コース」で「外国の恋人たち」という特集を組んだ際、戸外で抱擁する恋人のカラー写真をのせた結果「中学、高校生の雑誌になにごとだ」と詰問された、と立風書房の下野博社長は語る。ここから、タブーとされる表現として「同じ宿で眠る」「新婚旅行」「戸外で抱擁」等があったことが分かる。

この記事では「少女小説の性の展開は一年前から急激に広まった。」とされている。これに対して当時の「小説ジュニア」の編集長・塩沢敬は「おとなの世界の雑誌、週刊誌、テレビにふんだんにでてくるラブシーンなどの率直な反映。（略）性を描くことが目的でないことは当然。」と述べ、性愛表現を描くことを全肯定はしていない。

バッシングは他の新聞社でも取り上げられる。「よみうり寸評」（一九七〇年一月二四日『読売新聞』夕刊）では、「（十代、ジュニアと呼ばれる）この世代の女の子に人気のある少女雑誌のジュニア小説にセックスがはんらんし、主人公の少女がキスどころか性体験をする物語がいっぱい、知らぬは親ばかりで、昨春まで問題にしていた教育界も最近はあきらめた気配がある。」と、朝日新聞と同様のバッシングを載せている。さらに「ジュニア文芸」「女学生コース」の誌面に対して、「十九歳の男友だちと一度の交渉で体の異常をきたした十七歳の少女が急死した恋人の子を産むといった筋など愛と性がテーマ。避妊薬やオナニーまで出てくる」こと、「小説だけでなく、ジュニアのための性講座や「限界はキス？」といった中学生の男女交際についての座談会」が出てくることを挙げている。ここから、小説内の性愛表現のみならず、性教育的記事が登場したことが分かる。

その後朝日新聞で「特集　ジュニア小説と『性』」（一九七〇年二月一日『朝日新聞』）という特集が組まれ、ジュニア小説家の富島健夫、津村節子の投書、ジュニア小説読者の投書等様々な意見が掲載された。まず記者がジュニ

ア小説に対し、「抱合っている場面とか、キスシーンのさし絵は多いが、現代の世相から見ればそれほど目くじらたてて騒ぐほどのものでもない」と、描写そのものは過激ではないという見解を示している。しかし、「高校生同士が肉体的愛情にまで進むという小説が、昨年の初めごろから現れているので（略）次第にエスカレートするのではという恐れ」があると、編集側に厳しさを求めている。

「小説ジュニア」編集長の塩沢敬は「うちの雑誌の場合は、愛情を表現するシーンも、描写はできるだけひかえてもらっています。」と述べており、性愛表現を前面に押し出す事を編集側は良しとしていないことが分かる。

ジュニア小説作家の意見も様々である。富島健夫は「『ジュニア小説』は、過去の少女小説とは無縁であり、読者層もいちじるしく異なっている。作中に『性』がとり入れられることはたしかにあるが、それは全体から見てきわめてわずかである。」「作品のテーマ上必要不可欠のときだけであって、読者の若い好奇心をそそるために、それを拡大するということはない。」と、少女向け読み物を作るうえで性愛表現が必要な場合があること、そのシーンは全体的にまだ少ないことを語っている。

富島に対し、同じくジュニア小説作家の津村節子は、「ジュニア小説に性の問題がとりあげられるようになったのは必然的なこと」ではあるが、「いたずらに少女の官能を刺激するような描写は、そのシーンの強烈な印象にテーマ自体が薄れてしまう結果にもなりかねません」と、性愛表現について全面的に賛成しているわけではない。

中学生の読者らは、「（性の知識を得る）教科書でもある。」「（性の知識を知ってから）とてもショックで、二か月近くはおなかの大きな人を見ると、その人たちがとても汚れたもの、おとなでは不潔だと思った」。「いま、わたしたちは、性教育を受けている一部の人たちを、とてもうらやましいと思っている。」「現代の性のはんらんの中で、少しでも正しい性の姿を知り、理解したいと思っている」から読むのだと述べている。ここから、「性的なことは

不純である」という純潔教育が浸透していること、純潔教育ではない性教育を望む少女の姿が読み取れる。

二―三、バッシングに対するジュニア小説の反論

これらの批判に対して「ジュニア文芸」は反論をしている。「ジュニア文芸」は、一九七〇年四月号において、「朝日新聞記事を否定する！『少女小説にセックスがいっぱい』に私たちは抗議する！」という特集を組む。この特集内で編集長の林力が、「オトナの無知と偏見 を打ち破ろう！ 朝日新聞記事を否定する」という記事を載せている。

一、「少女小説セックスがいっぱい 知らぬは親ばかり」 というのは事実に反する。
掲載された小説の一部分だけを抜き出して、セックス記事が氾濫しているような印象を与えている。「知らぬは親ばかり」というのも誤りである。（略）
一、小説の内容にふれていない。
（略）性の部分だけを抜き出すことによって内容にはまったく目をつぶり、巷に氾濫しているエロ小説を想像させるような印象を与えている。
一、これがもっとも重要な点だが、このような記事の発想法の根底にあるもの ――オトナのエゴイズムである。
そしてオトナのエゴイズムにおもねるマスコミである。
長い間、性の問題についてオトナたちのとってきた態度は、「クサイ物にはフタをしろ」というやり方でした。
この方法が現在ではむしろ誤った方法であると考えられていることは、だれも異存のないところだと思います。

（略）現在、いわゆるオトナの世界を見渡してみると、目にふれるところ、「セックス」のないものはない、といっても言いすぎではないと思います。新聞、雑誌、テレビ、映画、はては広告までいたるところにみられます。オトナはすでに性の氾濫に無感覚になりつつあるのではないか、と思われるほどです。皆さんを、それらすべてから隔離することはとても不可能なことです。それよりも、セックスに対する正しい対応の仕方とはどんなものか、それを皆さんといっしょに探していきたいのです。

一、『ジュニア文芸』は性の問題を興味本位には扱わない。

（略）すぐれた読者は興味本位の性にはソッポを向きます。

「ジュニア文芸」側の主張としては、大人のメディアには性描写が氾濫しており、そのようなメディアから十代の男女を隔離することは不可能であるにもかかわらず、「クサイ物にはフタをしろ」という形で、十代の男女にたいし、性にかんする知識を一切教えないというのは、誤っている、ということを述べている。

実際、「ジュニア文芸」におけるジュニア小説で愛情をあらわす行為は、主人公の男女に限定すれば、一九六九年、一九七〇年においては、「握手」、「抱擁」、「キス」が多数を占める。そして、ストーリー構造は、主人公の男女が、純愛を成就させるというものが、ほとんどである。ここで言う純愛とは、「男女の主人公が、まずは友人同士としてカップルになってつきあい、その後に愛の告白をしあい、結婚の約束をしあう」[(3)]という順序を踏むことを指す。「ジュニア小説」に登場した性愛は、以上のような純愛の手順を踏んでおり純潔思想の流れを汲んでいる

二―四、純愛の中で語られる性愛

ジュニア小説作家のなかでは、富島健夫が、もっとも男女の性愛を扱った作家であると思われる。その富島の作品は男女の純愛を主に描いている。「トップ対談　佐伯千秋　富島健夫　はばたけジュニア小説」（「ジュニア文芸」小学館、一九六八年四月号）の中で富島は、「ぼくは少女が書けないんですよ。ぼくの理想の女性像だけを書いている」、「ぼくはやまとなでしこが大好きなんだ」と語っており、清純な少女を描くことを得意としていたことが分かる。さらに、「一九七〇年に思う　青春と真実」（「ジュニア文芸」小学館、一九七〇年一月号）では「ぼくは、ぼくの五十万読者のほとんどが清純な乙女であることを確信している（略）。（略）つまりぼくは、今のきみたちが、かつてぼくが少年の日にあこがれた初恋の人とまったくちがいはないという認識の下に生きており、だからこそ作品を書いているのである」と述べていることから、清純な少女読者に向けて、清純な少女と少年の純愛物語を作っていたことが読み取れる。

富島とは純潔について次のように述べている。「純潔な十代の少女なら、接触欲はあっても性交欲はないはずだ」。「純潔な十代にはそんな欲望はない」。「第一、十代でセックスをすることが、幸福につながるのかどうか。男は口では結婚相手の処女性にこだわらないというけど、これはウソですね。新しがっているだけで、本心は処女を求めている。女性はほんとうに愛し合っている相手と処女で結ばれて、愛し合いながら、性を深めていく。それがすなおな理想のかたちですよ[(4)]」。

積極的に作品に性愛表現を取り入れ、性の解放を描いているようにも見えるが、婚前の純潔を守ることを理想としている。

富島の代表作であり、ジュニア小説バッシングのきっかけともなった作品『おさな妻』も、富島の理想とする

三

「清純」な少女の純愛物語である。この作品は、主人公である高校二年生の玲子は、叔父に強姦されかけたこと、アパートの女性たちの性的に奔放な様子を目撃したことから、大人に嫌悪感を抱く。同時に、そうした大人と真反対である誠実な吉川誠一と恋に落ちていく、という物語になっている。

結婚後の初夜の純愛の場面と対比させる形で強姦、性の奔放さが描かれている。玲子はそれに嫌悪感を示し、婚前の純潔を重視するようになる、という物語構造になっている。

連載中の『ジュニア文芸』読者通信欄では、「八月号で、おとなのみにくさを描いてくださって、こんどは、吉川さんのようなりっぱなおとなを描いてくださったことに感謝しています」[5]とあり、読者も玲子同様、性に奔放な大人と誠実な吉川誠一を対比させて読んでいたことが分かる。

さらに、初夜の場面は結婚後であり、お互いの愛の象徴的な行為として描かれている。このように、富島作品では婚前の純潔が重視され、性愛行為は純愛の手順を踏んだ上で行われる愛の象徴として描かれている。先にも述べたとおり、ジュニア小説における性愛とは、あくまで純潔思想の延長線上に存在するものであったのだ。

三、純潔教育とジュニア小説の衰退

三―一、純潔教育とは

純潔思想にちなんだ純潔教育とは、「単にいわゆる性教育の部面にとどまることなく、同時に一般道徳教育、公民教育、科学教育、芸能文化教育との連関において、およそ左のような点に目標をおき、総合的に推進すること

（一）社会の純化をはかり男女間の道徳を確立すること

（二）正しい性科学知識を普及し、性道徳の高揚をはかること
（三）レクリエーションを奨励し、健全な心身の発達と明朗な環境をつくることに努めること
（四）宗教、芸術、その他の文化を通じ、情操の陶冶、趣味の洗練をはかること」であり、

また、「恋愛及び結婚に対する観念、感覚は純潔教育によって洗練され、高められるべきである。また、貞操は相手のためにのみ守るのではなく、みずからの人格として必要であり、男女相互の倫理であることを自覚するように導くこと」[6]である。

「純潔」は「性的交渉に対する制約であり、結婚を条件とする」。つまり「性的交渉は結婚当事者間に於けるもののみを純潔と認める」。この「純潔」はさらに「結婚前の純潔」と「結婚後の純潔」に分けられ、前者は「性的交渉の欠如」を意味し、童貞と処女が求められるのに対して、後者は「夫婦間以外に性的交渉のないこと」を意味し、男女の貞操が求められる。

つまり、ここで言う「純潔」とは「性的純潔」、すなわち「男女間の肉体的関係が性道徳の定むる基準に合致する」ことと定義され、「純潔教育」とは、「純潔の意義とその実行方法を教ゆること」を意味していると考えられる。したがって、「純潔教育は性教育の一部で、主として性道徳を教導の対象とする」。

このように、「純潔」とは結婚までは性交を控え、結婚後は夫婦間以外に性交渉をしないことであり、純潔教育とは大人社会にとって望ましい「男女間の正しい道徳秩序」を確立させることである。具体的に言えば、「強い意志によって自制する習慣」[7]をつけさせることである。

実際、宇都宮市が一九六二年から全国に先駆けて行った純潔教育では「純潔教育の本筋」は、「性に対する正しい感覚や観念を植えつけること」と、「性行為を神聖なものとして、結婚という正式な手続きをとらない限り、み

三

だりに行ってはならないこと」を教え込むことで十分であるとされ、その上で純潔教育は「完ぺきな社会的人間育成のための手段」とされる[8]。

一九七三年の朝日新聞では、純潔思想に関して賛否の意見が登場している。「複雑、多様なセックス観―根が深い伝統的な「純潔」思想」（一九七三年九月一六日『朝日新聞』）において、「社会のうわべだけみると、セックス、あるいは、セックスについての考え方が解放されているようだが、（略）まだまだ伝統的な「純愛」、あるいは「純愛教育」といった考えが社会の底流として根深いようだ。」と、純潔思想的な性の解放について問題視がされている。

記事には、純潔思想を支持する者の意見と、異なる立場をとる者の意見が載っている。純潔教育的意見として、性愛行為とは「種族保存のため、天から与えられた本能であり、愛するものとの性的一致は、精神的に安らぎを与える」という考えがある。また、「性教育は、人間完成教育の一端であるから、特に生徒の前で性教育ということばを使ってはいけない。男女が性的に触れ合うことは、結婚した男女にのみ、神から与えられ、許された行為である。人間はいかなる理由があっても結婚するまでは触れ合ってはいけない」とする意見や、「性教育より以前に、自然の摂理を教え、情報教育することこそ、自然の性教育」とする意見が掲載されている。

一見純潔思想に批判的に見える、「一般社会、家庭での根強い男尊女卑による処女崇拝思想が正論としてまかり通っている現在、ゆがめられたセックス論を、若ものによって正さねばなりません」という意見もあるが、「そこに愛の条件が整っていなければ」ならないと続き、純愛の手順を踏むことを要求しているため、純潔思想から脱出できていない。

一方、実践的な性知識を教えるべきとする意見も登場する。「私は高校生に、性行為は快楽のためだとはっきり

述べ、父母の性行為の邪魔にならないよう心がけなさい、とまでいっている。さらに、積極的に避妊するよう注意している」といったような考えが掲載されている。

この記事からは、「十代に群がるＳＥＸ中高生雑誌にも進出」（一九六九年一月二六日『朝日新聞』）に見られた対立構造から変化が確認できる。一九六九年の段階では、「純潔教育（性教育）をすべきという立場／純潔教育はするべきでない」という対立構造が見られた。この時点では性教育とは純潔教育を指し、問題点は「少年少女に性教育をすべきか否か」という点だった。しかし、一九七三年の段階では、「純潔教育派／実践的な性教育派」のような構造になっている。ここでの問題点は「少年少女に行う性教育において適切なのは純潔教育か、実践的性教育か」という点であるため、一九六九年から性教育論争が発展していることが分かる。

三―二、ジュニア小説ブームの衰退

一九六六年から一九七〇年にかけて人気を誇ったジュニア小説だが、七〇年代前半にはブームが終息し、『小説ジュニア』以外の雑誌は廃刊する。執筆者と読者の年齢差が拡大し、少女たちの今をとらえきれなくなったのだ。

後に、ジュニア小説にとって代わる形で現れた少女向け小説であるコバルト文庫の人気作家・久美沙織は次の様に語っている。「そこに描かれている、高校生の会話とか、生活感覚とかが、どーもヘン。はっきりいうと「古い」。ぜんぜんピンとこない」[9]。

ここで、当時活躍していたジュニア小説の代表作家の、一九六九年当時の年齢を確認する。

清川妙　：女性　四八歳

川上宗薫：男性　四五歳

三五

吉田とし：女性　四四歳
佐伯千秋：女性　四四歳
津村節子：女性　四一歳
富島健夫：男性　三八歳
平岩弓枝：女性　三七歳

ここから、当時のジュニア小説作家と少女読者との間に二〇から三〇歳近くの年齢差が存在していたことがわかる。たとえば、諸星澄子『白百合の祈り』（集英社、一九七七年）では、作中のキーワードとして農地改革が登場するが、一九四七年頃を舞台にした小説を読者たちが「古い」と感じるのも納得できる。また、富島らの描いたような純潔思想を基盤とした性の解放も、少女読者の持っていた価値観と相違があったことが考えられる。

久美同様コバルト文庫の代表作家である氷室冴子らは対談でジュニア小説と少女マンガを比較してこのように語っている。

（久美）「だから、私達がまだ投稿者だったころって、オジ様オバ様だったでしょ、書き手が私達の真上っていなかったじゃない。落合恵子さんとかいらっしゃっても、少女小説だけ書いている人じゃないし、だから私は少女マンガの方に流れちゃったけど、マンガの方だといるのよね、二〇代後半、三〇代前半でいろんなものを描いている人たちが。だから、ああいうのを小説でやりたいって気持ちはあった。」

（氷室）「意識としての少女小説って言ったらおかしいけど、今の中高生を意識してね、その人達が面白がる

ものを、上から下に下りてくるんじゃなくて横すべりする形で書きたいっていうか……」[10]

少女読者と同世代の少女マンガ家の一人として、竹宮恵子は対談で語られているような取り組みを行っている。少女マンガにおける性描写の発展に、「古い」少女向け読み物からの脱出の思いがあったのではないかと考えられる。

四、七〇年代の性教育とそれを巡るメディア展開

四―一、保健体育の教科書

中学生[11]、高校生[12]の教科書から、教育の現場で性教育が不十分であったことがわかる。避妊の説明が具体的に明記されだしたのは八〇年代以降であり、ジュニア小説において性愛表現が出現した頃にはまだその項目がなかった。少女たちが、「（キスや抱擁を何度もしてしまい）私はこんなことをしていると、妊娠するのではないかしらと不安でなりません」[13]といった疑問を持ち、教育以外の現場に性知識を求めたのも納得できる。

また、教科書において提示された女性の生き方にも注目したい。女性は「静か」[14]で「調和と優美を好み」[15]、「妊娠・出産」[16]の義務と責任をもつこと、そのために「純潔」を守ること。これが教育の現場における「望ましい女性像」であり、少女たちに課された重荷であった。そして、性愛行為は夫婦による家族計画を目的としていなければならなかった。こうした教科書の方針に対して、ジュニア小説雑誌「ジュニア文芸」が、少女に対する性の解放についてどのような立場をとっていたかを、次に確認していく。

四―二、ジュニアのための性講座

ジュニアのための性講座とは、「ジュニア文芸」において一九六九年から一九七〇年に、奈良林祥によって連載されたものである。連載の企画意図は以下のようになっている。「性の問題に、悩んでいるジュニア。性を正しく理解したいと願っているジュニア。しかし、学校も家庭も、性についてはなるべくふれないでソッとしておきたい、と考えているようです。ジュニアは、性を正しく理解する機会がほとんど与えられていない、といってもいいすぎではないでしょう。この空白を埋め、ジュニアに正しい性を理解してもらうために、本誌はここに奈良林祥先生の『性教育講座』を企画しました」。

この連載では自慰など学校教育の現場では触れられていない内容にまで踏み込んでいるが、そこに書かれている知識はかなり偏りが見られる。例えば、「女性はハートで男のことを恋し、男は（ハートで恋をすることもできるけれど）廃物の処理をしたい欲望によっても、女性に恋をすることができるのです[17]」「自慰という行為は、男子にとっては、男として健康に育ってゆくための、必須課目です。女子には、自慰などというのはどうでもいいような、いってみれば、人生のアクセサリーのようなものです[18]」といった説明がされている。つまり、男性の欲望は肯定しながら、女性の欲望の存在を否定しているのだ。

さらに、奈良林は女性の欲望の在り方を限定している。「女性は、結婚して男に性を与えられるところから、セックスが始まればいい生きものです。ボーボワールというひとが、『第二の性』という書物の中で、〝女は女に生まれない、女につくられる〟という有名な言葉を残しているように、女性のセックスは、結婚し男によってつくられればいいものです[19]」。「男の性欲は、与えようとする欲望であり、女を征服するときに快楽を覚える性質をもっているけれど、女の性欲は、男の性欲を身に与えられたときに、この上ない快楽を覚える性質を持っている。これが、

男子と女子の性欲の違いです[20]」。奈良林は、男の性欲は攻撃型、女の性欲は受け身型と述べている。女性は、結婚後、男性に服従された時に性欲がうまれる。男性本位の「望ましい女性像」が正しい性の知識として書かれているのは問題だ。

奈良林の性講座では、女性側が性欲をコントロールしなければならない、という態度を示している。「自分の性欲に火がつくような状況を作るな、ということです[21]」。欲望をとげる自由を行使するのではなく、「我慢するという自由もある[22]」。これらはどちらも少女に対して発せられたものであるが、この発言の裏には、「婚前の処女を守るべきだ」という純潔思想が見られる。

避妊[23]に対しても、少女の立場を顧みない発言が目立つ。「妊娠して困る立場なら、なぜ、妊娠しないように、彼を断固として拒絶するなり、避妊を真面目に考えることをしなかったのか、この無責任ムスメ！[24]」。奈良林の発言には、性被害にあった少女の立場が無視されている。少女に寄り添った立場であれば、望まない妊娠に対する避妊方法等を載せただろう。コーナーは異なるが、読者からの人生相談に対して、三浦哲郎が「無理強いに肉体関係を結ばされたことを反省しなさい[25]」と回答している。雑誌全体が性被害の問題を無視している点で、こうした立場は少女を傷つけていたことが推測できる。

また、性愛行為に対して、これは愛の象徴的な行為であるという態度を取っている。奈良林は、「ペッティングとは、あくまでも、愛し合っている人の、やむにやまれない喜びが、自然に抱擁、あるいは接吻という形となって現れたという行為のこと[26]」と述べている。富島健夫も小説内で、同意見を主張している。

「性は独立したものではないということよ。（略）文字通り、あたしはあの人を愛し、あの人はあたしを愛し

てくれる。その象徴的な行為なのよ」

「すばらしいの？」

「すばらしいわ、二重の意味で。だから、あたしは週刊誌などでよく読むフリーセックスの人たちは、性を解放拡張しているのではなくて、それが本来持っている力の一面をほろぼしてしまっていると思うの。愛しているからよろこびが大きく、そのよろこびがさらに愛情を深めてこそうれしいのに、その種の人たちは物質的な面だけを追求しているもの。ほんとうのうれしさはそこにはない[27]」

ジュニア文芸において、性愛とは愛の具現化であり、衝動としての性愛は下劣なものという立場が取られていることがこれらの表現から読み取れる。

四―三、性教育に対する立場

ジュニア文芸は、性教育講座を連載するなど性の解放を主張する一方、作家は性教育に対して積極的ではなかった。作家の宮俊彦は、実践的知識を伝える性教育は必要ないと発言している。「もし性教育が必要であるとするなら、性がどのように行われるかとか、子供がどのようにして生まれるかなどを図解で教えたりするより、なぜ性行為が美しいのかを教えたい」。「〈精神的な結びつきのない性は汚い〉その考え方には徹していいのではないかと思う[28]」。

このような態度は、正しい性教育を受けたいと願う少女たちの希望とは真逆の方向を向いている。

その証左として、たとえばジュニア文芸の企画内で、作家たちが「ジュニアの愛の限界はどこまで？[29]」というア

ンケートに回答している。

「恋愛行為の限界はどこまで？（純潔は守るべきか）」（一部抜粋）

乾東里子先生「肉体の純潔は守るべきである。一度失った純潔はとり戻せない。守るべくして起きた過失は許されるが、純潔はいつか真実にあげるべき日（結婚）のためにしまっておこう。」

中村八郎先生「純潔は絶対に守るべきだ。握手ぐらいがいい。」

赤松光夫先生「限界などはないでしょう。ただし、男性と女性では、女性のほうがより結果を負担しなければならないでしょう。」

佐伯千秋先生「キスまでと思う。」

三木澄子先生「守らなかったためにいかに多くのものを失うか。それを語るには、長い小説を書かねばならない。自分に責任がもてる時期までは、守るべきだ。」

宮俊彦先生「純潔という言葉はきらいですが、心の底から愛せる男性があらわれるまで、たいせつにしまっておいてほしいですね。」

一四名のほぼ全員が「純潔は守るべき」と回答している。明確に答えていないものでも、「守るべき」という立場を含んだ回答になっている。「ジュニア文芸」における性の解放は、婚前の純潔を大前提としていることがわかる。

四一

教育現場の性教育に頼れず、ジュニア小説に助けを求めた少女たちに示されたものも、やはり純潔思想的な態度であった。女性の性欲を否定され、それは結婚後に男性に支配されることで形作られるのだと述べられる。少女のため、という建前でありながら少女に寄り添わず、男性本位の性知識を示した誌面が、性の解放を行っていたとは言い難い。「ジュニア文芸」の示した「望ましい女性像」とは、愛の精神的な部分を担い、婚前の純潔を守り、その後男性の攻撃的な性を受け入れる存在であったのだ。そして、性愛行為とは愛の象徴的な行為であった。

おわりに

学校教育がもたつく中で、メディアを通して純潔思想的な「望ましい女性像」が拡散されてしまった。学校教育も、ジュニア小説雑誌も、主体は基本的に男性である。当時の教育者たちは男性であったのだ。こうした、「少女の教育は男性が行う」という形式、男性本位な「望ましい女性像」の拡散に対抗する形で少年愛マンガが登場する。それが、竹宮らが作り出した「少女とお姉さんのコミュニティ」であったのだ。

註

(1) 「おたよりサロン」(「週刊少女コミック」小学館、一九七六年第一五号・四月四日号)

(2) 「おたよりサロン」(「週刊少女コミック」小学館、一九七六年第二〇号・五月九日号)

(3) 今田絵里香「ジュニア小説における純愛という規範」成蹊大学文学部学会編『文化現象としての恋愛とイデオロギー』(風間書房、二〇一七年)

(4) 「十代は純潔であれ」富島健夫・佐伯千秋対談(「ジュニア文芸」小学館、一九七〇年二月号)

(5) 「ＪＮ広場」（「ジュニア文芸」小学館、一九六九年一一月号）
(6) 文部省純潔教育委員会『純潔教育基本要項』（一九四九年）
(7) 文部省教科調査官・堀久編『純潔指導』（明治図書、一九六八年）
(8) (7)に同じ
(9) 久美沙織『コバルト風雲録』（本の雑誌社、二〇〇四年）
(10) 正木ノンVS田中雅美VS氷室冴子VS久美沙織「少女小説家だけが生き残る！！」（「Cobalt」集英社、一九八四年冬号）
(11) 一九六八年の教科書（本間茂雄、吉田清ほか『新改訂版　中学校　保健体育』大日本図書、一九六八年）における性教育は、身体の図もなく、第二次性徴による身体的変化を簡単に記した程度の知識に留まっている。これ以外に性知識に触れているのは、伝染病の項目にある性病の部分のみである。「性病には、ばい毒やりん病があり、おもに接触によって伝染する。性病の害は、本人だけでなく、子孫にまでおよび、家庭を不幸にし、社会にも悪い影響をあたえる」。ここでは感染経路が「接触」という言葉になっているため、具体的にどのような接触を指しているか説明が不十分である。その接触によって感染してしまう病気が、「家庭」や「社会」に悪影響を及ぼすという表現は圧力を感じるため、少女は男女の些細な接触にも怯えていたのではないかと考えられる。
一九七一年（佐々木吉蔵、宇土正彦、田中恒男ほか『改訂　中学校　新保健体育』大日本図書、一九七一年）になると、性教育の項目が増えていることが確認できる。まず、男女の裸体、性器を説明する図が登場したことが大きな変化だ。それに伴い、精通現象、月経の説明も加えられる。性病についても、「直接接触」によって感染するといった書き方になり。一九六八年の説明から若干の進歩が見られる。男女交際に関して、「正しい交際

四三

のあり方を学んで、中学生にふさわしい生活態度をもつことが必要」と説明がされているが、この「正しい交際のあり方」が、純潔思想に基づくものであると考えられる

⑿ 高校性の教科書になると、中学生のものに比べて早い段階から性知識が載せられている。一九六六年（今村嘉雄、杉本良一ほか『高等保健体育』大修館書店、一九六六年）の段階で月経の現象、その要因について書かれており、中学生の教科書では一九八〇年（佐々木吉蔵、宇土正彦、船川幡夫、田中恒男ほか『中学校　保健体育』大日本図書、一九八〇年）になるまで登場しなかった日本人の初潮年齢の表も掲載されている。大きく異なるのは妊娠・出産に関する項目だ。中学生の教科書ではタブー視されていた妊娠・出産について、高校性の教科書では説明がされている。

さらに、異性との交流に関する項目では、「感情や衝動の動くままに行動がとられると、相手の人格を傷つけたり、純潔を失ったりして、取り返しのつかないことになることがあるので注意しなければならない」といった忠告がされている。ここから、当時の性教育の根底にある思想は純潔思想であったことがわかる。

⒀ 奈良林祥「ジュニアのための性講座」第四回（「ジュニア文芸」小学館、一九六九年七月号）

⒁ 「男子と女子では情緒にもちがいがみられる。いっぱんに男子は強く、たくましいものや、活動的なこと、冒険などを好むが、女子はやさしく、美しいもの、静かなものを求めるようになる。」（佐々木吉蔵、宇土正彦、船川幡夫、田中恒男ほか『中学校　保健体育』大日本図書、一九八〇年）

⒂ 一九六六年の高校の教科書（註⑿）において、性差に関して以下のように述べられている。「精神的にも男女のあいだに差異があらわれ、男子は競争や果断を好み、女子は調和と優美を好むようになる」。「男女は人間としては平等であるが、その社会や家庭における役割や機能は同じではなく、それぞれの特長を生かした生きかたが

よいことをあらわしている」。このように、教育の現場において少女の役割や個性が定められていった。

(16) 教科書によって少女に示された「望ましい女性像」とは、母になるということだ。一九六六年の高校の教科書（註(12)）では、「女子は、母親となるために妊娠・出産というたいせつな任務をはたさなければならない。」「妊娠・出産は、精神的にも身体的にも、女子にとっては、重い負担である。しかし、母になるためには必ず経験しなければならない試練である」と記されている。これより、少女は妊娠・出産を経て母になることが義務として教育されていたことがわかる。

避妊についての項目が追加されている点も、高校生の教科書の特徴である。しかし、具体的な避妊方法が明記されていない点から、性教育をすることは「ねむった子を起こすようなこと」という思想が当時強く残っていたことが伺える。

一九七七年の教科書（今村嘉雄、猪飼道夫ほか『高等保健体育　新改訂版』大修館書店、一九七七年）では、少女に課せられる母親の役割はさらに強くなっていく。「健康な母性が健康な子どもを生み育て、幸福な家庭を築いていくことは、その家庭や社会にとっても、大切なことである」。「女性は、自分の健康について留意するだけでなく、妊娠・出産をとおして、次代の子どもたちの健康を守っていく責任をもっている。母性とは、ふつう妊産婦のことをさすが、とくに保健体育の立場からは、妊娠・出産が可能な年齢層、たとえば、思春期の保健も大切である」。これらの文章では、少女に妊娠・出産について「責任」という言葉を用いている。妊娠・出産は義務であり、子育ては女の責任、こうした重圧が少女に課せられていたのである。

(17) 奈良林祥「ジュニアのための性講座」第二回（「ジュニア文芸」小学館、一九六九年五月号）

(18) 一七に同じ

四五

(19) 一七に同じ
(20) 奈良林祥「ジュニアのための性講座」第三回（「ジュニア文芸」小学館、一九六九年六月号）
(21) 二〇に同じ
(22) 奈良林祥「ジュニアのための性講座」第一三回（「ジュニア文芸」小学館、一九七〇年四月号）
(23) 教育の現場において、あくまで避妊は「その家庭にとってのぞましい児数と出産間隔を調節する」方法であり、少女が自分の身を守る方法としての説明はされていない。（今村嘉雄、猪飼道夫ほか『高等保健体育　新改訂版』大修館書店、一九七七年）避妊によって自ら望まない妊娠から身を守るべきだという女性解放運動が、日本の教育現場では家族計画の話にすり替わっていしまっているのだ。避妊についての説明の根底にも純潔思想が含まれていることが読み取れる。
(24) 奈良林祥「ジュニアのための性講座」第六回（「ジュニア文芸」小学館、一九六九年九月号）
(25) 三浦哲郎「人生相談室」（「ジュニア文芸」一九七〇年一〇月号）
(26) 奈良林祥「ジュニアのための性講座」第四回（「ジュニア文芸」小学館、一九六九年七月号）
(27) 富島健夫『君に誓う』（「ジュニア文芸」小学館、一九六九年一二月号）
(28) 宮俊彦「ジュニア小説の中の愛と性　8」（「ジュニア文芸」小学館、一九七〇年五月号）
(29) 「ジュニアの愛の限界はどこまで？」（「ジュニア文芸」小学館、一九六九年三月）